

WorldShift Actions 2011 スピーチ

東京

2011.10.29

GOoD DESIGN

鈴木エドワード

あなたは日本をどうしたい？

WorldShift

世界平和・調和



敵を愛す・他人の中に自分を見る

“ある建築家のGOoD DESIGN哲学”



Photo: The Last Whole Earth Catalog



Fig.1,バックミンスター・フラー

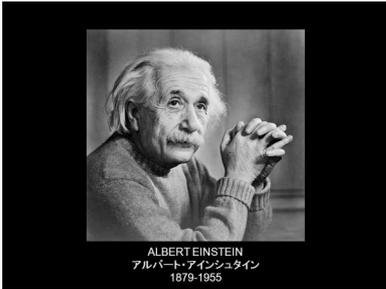


Fig.2,アインシュタイン



Fig.3,宇宙船地球号

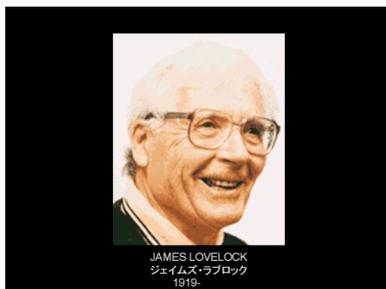


Fig.4,ジェイムズ・ラブロック



Fig.5

私は建築に負けず科学が大好きです。なぜならば、科学は「自然の仕組み」の追求だからです。最近、私はこの「自然の仕組み」を「神の建築」または「GOoD DESIGN」とも呼んでいます。

「宇宙船地球号」という言葉を世に出した私が尊敬する思想家、バックミンスター・フラー (Fig.1) はあるとき次のようなことを言いました:「もし“詩”が最大を最小(限の形)で表現することであれば、史上最大の詩人はアインシュタイン (Fig.2) ではなかっただろうか?なぜならば、彼はこの宇宙すべてを $E=Mc^2$ でまとめてしまったから。」

$E=Mc^2$ で象徴されるように「GOoD DESIGN」はまさしく「詩」です。GOoD DESIGN は Good Design。なぜならシンプルかつ美しいからです。GOoD DESIGN はエコロジカル、そしてエコノミカルです。「無駄」や「ゴミ」は人間だけが生み出すものです。また、GOoD DESIGN で最も重要な点は「関係性の組織」ということです。宇宙で最も基本の単位、原子は 99.999%がらんです。物の根底には物はありません。関係性だけです。

私たちの「奇跡」、美しい「宇宙船地球号」(Fig.3)も関係性で成り立っています。50年も前からジェイムズ・ラブロック博士(Fig.4)は“地球は一つの生命体”である、という理論を打ち出しました。地球上のすべての有機物から無機物までが皆「自己規制」を行い、「自己安定」を図っている、と。

しかし、言うまでもなく、今地球にはある異変が起きています。1つとしては温暖化の影響から各地で自然災害が勃発しています。人間社会にもアンバランスが生じています。少し前、インターネットで流れていた情報が1冊の本にまとまりました。題して「地球がもし100人の村だったら」(Fig.5)。今日この会場にお集まりの大勢の皆さんは既にご存じかとは思いますが、この本の中には次のようなことが書かれています。“20人は栄養が十分ではなく、1人は死にそうです。でも15人は太りすぎです。すべての富

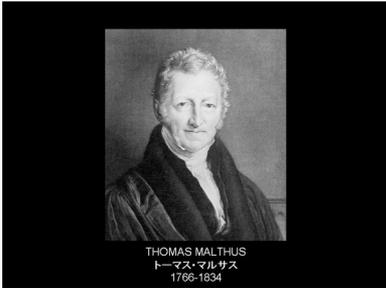


Fig.6, トーマス・マルサス

のうち、6人が59%を持っていて、みんなアメリカ人です。74人が39%を、20人がたったの2%を分け合っています。すべてのエネルギーのうち、20人が80%を使い、80人が20%を分け合っています。村人のうち1人が大学教育を受け、2人がコンピューターを持っています。けれど、14人は文字が読めません。”

なぜ、こういう不平等な世の中なのでしょう？

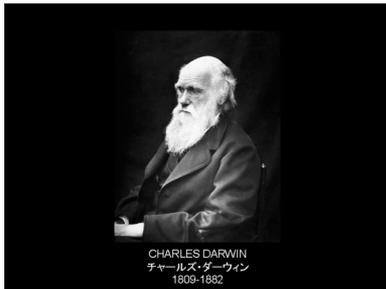


Fig.7, チャールズ・ダーウィン

昔、トーマス・マルサス(Fig.6)という経済学者は、イースト・インド・カンパニーというところから派遣され、ある研究を行いました。その結果、彼は次のようなことを発表しました：“人間の食料生産以上に人口は増加しているので、100%の人類は生き延びられない。”

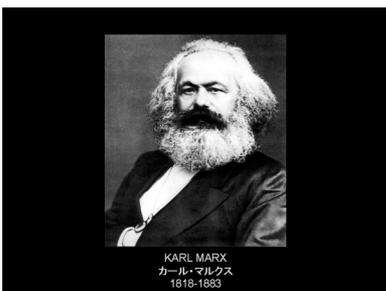


Fig.8, カール・マルクス

その後、チャールズ・ダーウィン(Fig.7)という生物学者は、“もしそうならば、「弱肉強食」の原理のもとに一番強い者が生き延びる。”

その後、カール・マルクス(Fig.8)という経済学者は“もし、マルサスやダーウィンの言うことが正しいのならば、直接生産に関わる労働者が生き延びるべきだ。”



Fig.9, アドルフ・ヒットラー

そんな歴史の流れの中、アドルフ・ヒットラー(Fig.9)は“ゲルマン民族が一番優れているから彼らが生き延びるべきだ”、と主張しました。最近では、東ヨーロッパで「エスニック・クレンジング」のもとに大量虐殺がありました。また、極々最近、身近なところでは「リーマン・ショック(Fig.10)」がありました。無論これは普通の戦争ではありません。しかし一種の戦争と言っても過言ではありません。なぜこのようなことが起きたのでしょうか？それは、マルサスの結論のもと、またダーウィンの「弱肉強食」のもと、相手を犠牲にしても自分が生き延びることが自然の掟、正しい、美しい、とまでされたからです。



Fig.10

しかし、1957年、国連食糧農業機関(FAO)のレポートの中に、次のようなニュースが記載されました



Fig.11

(Fig.11) : ここに来て初めて人類はテクノロジーの発展により、人類の100%が生き延びられる食料生産が可能になった！現在の世界のリーダーや政治家のうち何人がこの事実に目覚めているでしょう？仮に知っているても、何人がこの事実を生かしているでしょう、自分の権力を守ったり、欲を満足させる代わりに？



Fig.12

動物は相変わらず「弱肉強食」の世界を生きています (Fig.12)。しかし、動物は決して意味のない、無駄な殺し合いはしません。ましてや悪意を持って。「生物学的必然性」から殺し合い、生き延びているのです。また、決してすべての競争が悪いとは言えません。例えば、オリンピックの競技で記録を競うことはポジティブで建設的です (Fig.13)。



Fig.13

しかし、「弱肉強食」のもとに行われる宗教、イデオロギー、権力、欲、またはゲーム感覚の遊びの戦争はすべてネガティブで破壊的です。

最近科学界で明らかになりつつある事実があります。それは、実は「競争」以上に「協力」により生物はここまで生き延び、進化したということです。わかりやすい「協力」の例を挙げましょう (Fig.14)。私たちの体は何十兆の細胞で成り立っています。1kgあたり1兆の細胞がある、と言われていいますので、70kgの人は約70兆の細胞に支えられています。想像してみてください。各々の細胞が勝手な考えのもと、勝手な行動を起こしたならどうなるか！ましてやお互いがケンカでもし始めたらどうなるか！言うまでもなく体は成立しません！

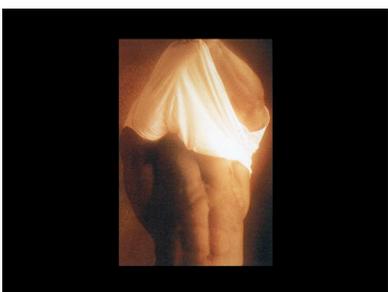


Fig.14



Fig.15

私たちの地球には約70億の人々が住んでいます (Fig.15)。体の細胞と比べると1/1000です！「脳」の無い細胞たちが協力しあい、体と言う生命体を維持出来るのなら、「脳」があり、また1000倍も少ない私たちにはもっと簡単に協力しあい、この地球という生命体を維持出来るはず (Fig.16)。



Fig.16



Fig.17,ワトソン, クリック博士

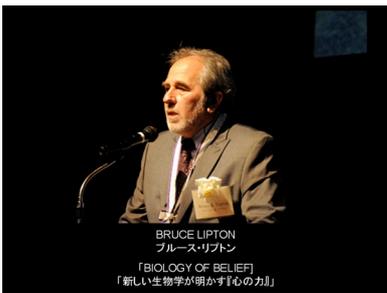


Fig.18,ブルース・リプトン



Fig.19

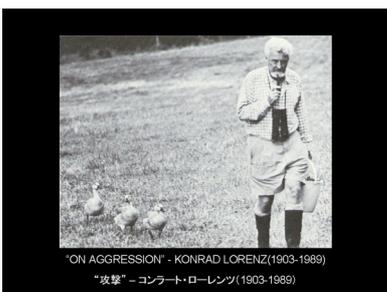


Fig.20,コンラート・ローレンツ

もう一つ、科学界で最近明らかになりつつある事実は、次のことです。人間の善し悪しを決めるのはどちらなのか：DNA（遺伝）なのか、環境（育成）なのか？

いわゆる「NATURE vs NURTURE」論争です。ワトソン/クリック博士ら(Fig.17)が DNA の2重らせん構造を発見して以来、人間の善し悪しはすべて DNA によって定められる——物質的な体はもちろん、私共のパーソナリティさえも DNA に支配されている——と長年思われてきました。

しかし、ここに来て、アメリカの生物学者ブルース・リプトン氏 (Fig.18) は次のように言っています：“確かに DNA は重要だが、私の長年の研究結果によって明らかになったことは、DNA 以上に重要なのは「環境」だ。環境も見える、見えないものがあるが、どちらかと言えば見えない環境、すなわち私たちの考え、心、気持ちが何より重要だ！環境は DNA を書き換えることさえできる力を持っている！” すなわち、昔から言われてきた「病は気から」が科学的に立証されたのです！また、リプトン氏は次のようなことも言っています：“人間、特に子供にとって最大の環境は家庭内の「愛」である。” (Fig.19)

昔、学生の頃、私は人類学者のコンラート・ローレンツ (Fig.20)の本「攻撃—悪の自然誌」を読み、大変感銘を受けました。しかし、最後のくだりにどうしても受け入れられない考えがありました。ローレンツ曰く、動物の間には「攻撃心」が働き、弱肉強食のもと、生き延びる。しかし、この攻撃心が同種内、すなわち同じ種類の動物の中で発生すると、その種が全滅してしまうので許されない。ならば、その攻撃心はどうなる？ローレンツは「愛」に変わる、と言ったのです！それはあまりにも出来すぎている人間感情論ではないだろうか、と私は反発しました。

しかし、ここに来て、つくづく思います、ローレンツは正しい、と。「愛」という言葉を挙げ、なに「きれいごと」を言っているのだ、と思うかもしれません。しかし、私は一切きれいごとなど言うつもりはありません。「愛」は「生物学的必然性」だと私は確信しています！

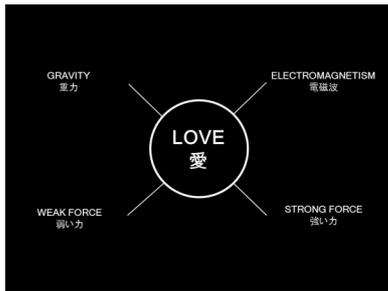


Fig.21

「この物質宇宙はスピリチュアルな非物質的「意識」によって支えられている(Fig.21)」ということを実感的に確信している私は、いずれこの物質宇宙の四つの力、すなわち電磁波、強い力、弱い力、そして重力、を統一している未だ発見されていない「力」は、実は「愛」以外何物でもなかったと明らかになっても決して驚きません。



Fig.22

しかし、世の中の現状はどうでしょう？

「9.11」(Fig.22)に象徴されるように大半が憎しみに燃える復讐のまた復讐！今の世界のリーダー、政治家たちは、元南アフリカの大統領ネルソン・マンデラ氏(Fig.23)から学ぶことが大いにあります。彼は 27 年間、刑務所に収容されていました。やっと解放され自由になった時、彼は何をしましたか？それは、決して「復讐」ではありません。彼はすべてを許し、水に流し、リセットしたのです。お互いそれまでの間違いを認め合い、許し合い、再スタートをきったのです。彼の言葉です：“許しが第一歩だ！許しが魂を自由にする！許しこそ恐れを取り除く最強の武器なのだ！”

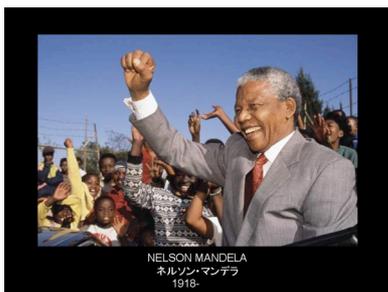


Fig.23,ネルソン・マンデラ

牢獄にいた時、マンデラ氏に何らかの「スピリチュアルな目覚め」、「意識革命」、があったのではないかと私は思えてなりません。我々は単なる家族ではなく、表情は皆違うが実は同じ存在。即ち、私はあなた、あなたは私、ということに気付いたのでは？

「人生は元々どこから来たのかを思い出す目覚め」だと私は信じています。そうです、私たちは神から生まれ、神へと戻るのです。それが **GOoD DESIGN** だと科学は私に教えてくれました。



Fig.24

進化の過程で大きなリープはいつも危機に迫られた時です(Fig.24)。宇宙船地球号も今その様な危機的分かれ道にきています。ブレイクスルーするかブレイクダウンするかの瀬戸際です。ブレイクスルーする為にまず第一に必要なのは、社会的ではなく、私たちひとり、ひとりの個人的な目覚め、個人的な革命なのです。



Fig.25

既に述べましたように、NURTURE は NATURE に勝ちました。しかしながら、世の中は決して恵まれた NURTURE (環境) ばかりではありません。恵まれない環境に生まれ育つ子供たちも大勢います。そういう子供たちに私は FUTURE(未来)を提示します(Fig.25)。人間は「MIND (マインド)」という、動物の中で唯一人間だけが誇る力を持っています。このマインドによって、人間は将来に夢を見、希望を持てます。夢、希望をなくして FUTURE はありえません。

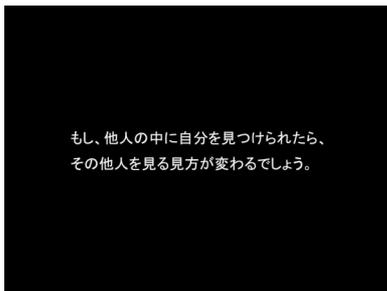


Fig.26

会場の若い皆さん、あなた達が私たちの FUTURE です。そして FUTURE はあなた達の手のなかにあります。しかし、残念ながらいくら NATURE, NURTURE, FUTURE が全てそろっているからと言って地球上での人間の成功は保証されるわけではありません。人間は精神的に弱い生き物です。人間は時に誘惑に負けカッとなり敵を作りがちです。通勤、通学のラッシュアワーのなか、駅のプラットフォームで誰かが誰かにぶつかってきた。「この野郎…」と、思う前に、実際誰が悪かったのか。相手なのか？自分なのか？仮に、相手だったとしても、もしかしたら何らかの事情があり、やむをえなかったのかもしれない。家族の誰かが、危篤なのかもしれない…。そういう時には、どうぞ相手の中に自分を見つける努力をして下さい(Fig.26)。もし他人の中に自分を見つけられたら、その他人を見る見方が変わるでしょう。その様な「スピリチュアルな目覚め」、「意識革命」があなた達の明日への唯一の希望です。

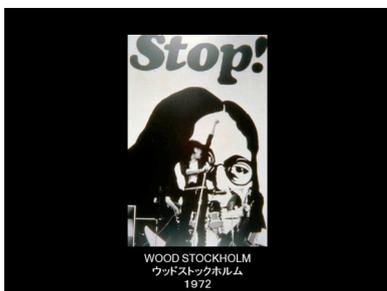


Fig.27

昔、大学を卒業してから1年間、私は就職をせずに環境運動に励んでいました(Fig.27)。そのクライマックスとして1972年、初めて「国連環境会議」がスウェーデンのストックホルムで開催されるのを機に、歴史に残るアメリカでのロックフェスティバル「ウッドストック」とストックホルムを合わせ、「東京ウッドストックホルム人間環境ロックフェスティバル」というイベントを、日比谷野外音楽堂で企画、実行し、大成功を収めました。

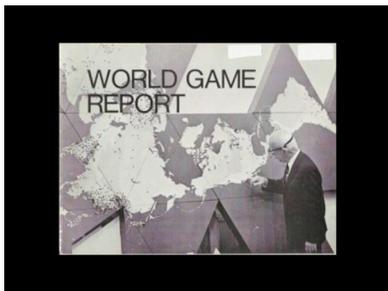


Fig.28



Fig.29



Fig.30



Fig.31

宗教と同じです。キリストもモハメッドもブッダも皆、素晴らしい教えを持っていました。しかし、そういう教えのもと大きな運動が生まれた時、「組織化」や「官僚化」が邪魔をします。

なぜこんなことをしたかといいますと、大学時代、バックミンスター・フラウ(Fig.28)という思想家に出会い、影響を受け、その結果、環境運動に走ったからです。フラウが発明、開発した数多くの作品の中には、最大効率が高く、強いドームとして知られるジオデシック・ドーム(フラウドーム)などがありますが、最もアンビシャスな構想は「ワールド・ゲーム」というものでした。フラウ曰く、「ワールド・ゲームとは、最もスピーディーな形で、自発的な協力により、エコロジカルなダメージや、誰一人不利になることなく、100%の人類の為に世界が働くアイデアである」というものです。一般のゲーム理論では誰かが勝てば、誰かが負ける、という構図です(Fig.29)。しかし、ワールド・ゲームでは、皆が1つの目的に向かい、協力し合い、頑張ればみんなが勝てる、という史上初のウィン・ウィン理論でした。当時、まだ発展途上のコンピューターやインターネットの力をいずれ借り、100%の人類を平和と富みに導く仕組みでした。しかし、それには1つ条件がありました。それは、「政治的国境」をなくし、地球が1つとして働くことでした。

このような条件から、残念ながらワールド・ゲームは実現していません。しかし、この構想は例えばCNNの創業者のテッド・ターナーなどに影響を与え、彼はCNNをスタートしたと言われていています(Fig.30)。また、最近では文化人類学者の竹村真一氏が同じく影響を受け、「触れる地球-TANGIBLE EARTH」(Fig.31)を開発し、今後の教育のツールとして世界的に脚光を浴び、期待されています。

私もワールド・ゲームを追求しようと1975年、幸いにもフルブライトの奨学金をいただき、フラウの事務所が隣接するハーバード大学に進みました。結論から言いますと、残念ながら私は挫折しました。その理由は、人間関係です。どんなに素晴らしい構想、夢があろうと、それを実現するには、その構想、夢を追う一人一人の人間性が問われます。

ワールド・ゲームもフラーの死後、残念ながらいまのところ機能していません。

そういう視点から、私は大きな社会的運動は素晴らしく、この世を改革するには絶対必要だとは思いますが、それ以前に、そういう運動を支える一人一人の意識、責任感、覚悟が根底に必要なだ、と確信しています。



Fig.32

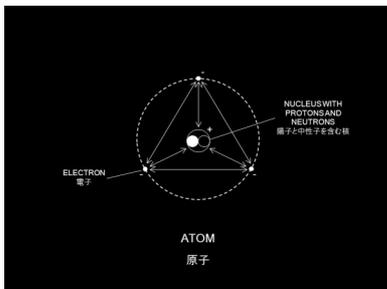


Fig.33

私が大変嬉しいのは、今日ここにお集まりの皆さんは皆、それぞれ自分の意志、意識、こだわりを持ち、WorldShiftのために自分一人一人が何をできるか、何をしようかを求めて集まっている、ということです。皆さん一人一人がそのようなしっかりした自分を保てば、小さなさざ波が集まり、いずれ巨大なうねりとなり、シナージェティックなWorldShiftが起きるのでは、と大いに期待できます。

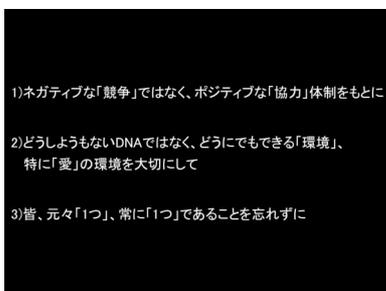


Fig.34

フラーのボキャブラリーの中で最も重要な言葉で「シナジー (SYNERGY) (Fig.32)があります。シナジーは「部分では予測のつかない全体の行動」を意味します。例えば、「水」の分子1つを取り上げましょう。水はH₂O、すなわちH(水素)2つとO(酸素)1つで成り立っています。単体では空中に浮く気体のHとOが結合すると、液体の「水」になるとは誰が予測できたでしょう？ 原子も皆同じです。すべての原子はまったく瓜二つの電子、陽子、中性子で成り立っています(Fig.33)。唯一違うのは、それらの数と配列です。それだけの違いによって原子はそれぞれの特徴を持つ、と誰が予測できたでしょう？これがシナジーです。「生命」や「意識」も私はシナジーの結果だと思っています。

最後に復習ですが、(Fig.34)

- 1) ネガティブな「競争」ではなく、ポジティブな「協力」体制をもとに、
- 2) どうしようもないDNAではなく、どうにでもできる「環境」、特に「愛」の環境を大切に、
- 3) 皆、元々「1つ」、常に「1つ」であることを忘れずに力を合わせ、頑張りましょう！

ありがとうございました。